

「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査」より

レジリエンスを育むための 保育者のかかわりを考える

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) ではアジア8か国・地域の研究者と連携し、2023年から2024年にかけて、子どもの「レジリエンス（困難な状況に適応して立ち直る力）」の育成がどのように行われているかを明らかにするために、保育者を対象としたインタビュー調査を実施しました。そのうち、日本の保育実践に関する調査を担当した佐藤朝美先生に、レジリエンスとは何か、園でどのように育めばよいかをうかがいました。



佐藤朝美先生（さとう・ともみ）

愛知淑徳大学人間情報学部教授。東京大学大学院学際情報学府博士課程修了。東京大学大学院情報学環助教を経て現職。教育工学、幼児教育、家族内コミュニケーション、学習環境デザインにかかわる研究に従事。日本子ども学会（理事・編集委員長）。著書に『物語行為の支援システムー親子の活動に着目して』（晃洋書房）など。

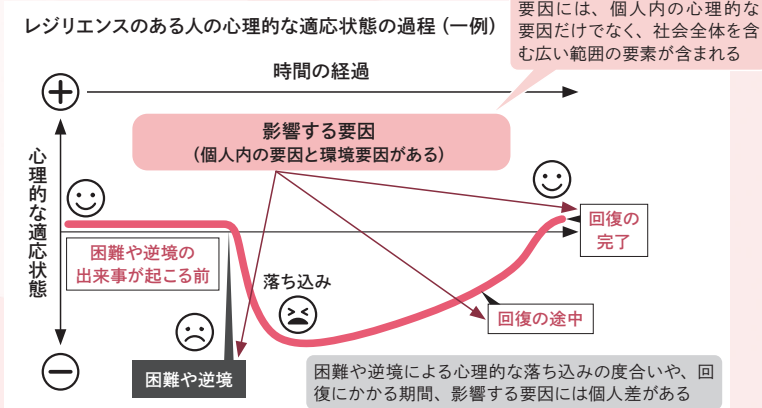
幼児期は、困難や逆境から回復するレジリエンスを育むチャンス

人は、困難や逆境に直面すると、心理的に落ち込むものです。しかし多くの場合は、時間の経過とともに落ち込んだ状況から徐々に回復していきます（図1）。こうした困難や逆境から回復していく力をレジリエンスと呼び、コロナ禍を機に世界的に注目されるようになりました。

レジリエンスが発揮できるか否かは、個人の生まれもつ資質による面もありますが、対人関係などの環境的な支えも影響すると考えられています。困難や逆境に対して我慢することを求めるのではなく、子ども自身がどうしたいかを考えて次の見通しをもてるように支援をすることで、レジリエンスは育まれていきます。特に幼児期は、子ども一人ひとりがやりたいことに没頭するからこそ、理想と現実のギャップや他者との衝突など、さまざまな困難や逆境が同時多発的に生じます。レジリエンスを育むチャンスにあふれていると同時に、園の存在が大変重要になるともいえるでしょう。

実際、今回の調査で園の先生方にレジリエンスの育成についてインタビューしたところ、「子どもたちに挑戦したいと思える活動を提供し、それを克服する体験を促している」「保育者からの肯定的な言葉がけや、友だちとの学び合いや支え合いを通じて、子どもたちが自信をもち、困難に立ち向かう力を育てている」など、日々の園生活で子どもたちにレジリエンスを育むための配慮をしているという声を数多く聞くことができました。

図1 レジリエンスの概念



※小塩真司、平野真理、上野雄己編（2021）『レジリエンスの心理学』（金子書房）による概念図をもとに編集部で作成。

「子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査 2024」調査概要

調査の実施者：チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)

調査のテーマ：子どものレジリエンスをどう育むか～アジア諸国の保育者の実践から考える～

調査対象：アジア8か国・地域（日本、中国、フィリピン、マレーシア、台湾、インドネシア、シンガポール、タイ）。予備調査：園長、主任保育者（各国4～8人、計45人）主調査：主に4～6歳の幼児を担当する保育者（各国約10人、計82人）

調査時期：2023年9月～2024年2月

調査方法：インタビュー調査

調査項目：「レジリエンス」「社会情動的スキル」の用語の認知・解釈／園における「レジリエンス」「社会情動的スキル」を育む実践・活動の実施状況 など

<https://www.blog.crn.or.jp/crna-research-activities.html>調査内容を詳しく知りたい方は、
こちらからアクセスしてください。▶▶▶

ページの下部の日本のカントリーレポートもご参照いただけます。



レジリエンスを育むために保育者にできること

園の先生方へのインタビューなどを通して、レジリエンスが保育実践の中で育まれるプロセスを整理したのが **図2** です。

子どもたちが困難や逆境を感じるのは、理想と現実のギャップを認識したときが多いと園の先生方は捉えています。「上手にできない」「友だちが遊んでくれない」など子どもたちが感じたモヤモヤの中には、すぐに解決できないものもあります。そうした中で自分の感情を理解し、簡単に解決できないことにもじっくり向き合ったり、ときにはやり過ぎたりしながら、解決策を模索します。その過程で、周囲の保育者や友だちの助けを得ることも大きな支えになります。そして、少しずつ状況を改善し、「こうすればできた」という成功体験を積み重ねることで、子ども自身が困難や逆境からの回復の見通しをもてるようになっていきます。

困難や逆境から回復しようとする子どもに寄り添う保育者のあり方として共通するのは、まず子どもの気持ちを受け入れることです。子どもが自分の気持ちを表現できるように支援し、どのよう

な感情も受け止めます。その上で他者とのトラブルがある場合には、相手の気持ちを整理し、理解できるよう促すことが求められます。そして、異なる考えを尊重しながら自分の理想を実現していくことを支援します。その際、保育者や友だちに相談したり、頼ったりできる環境を準備することも大切ですが、最終的には子どもが独り立ちできるよう支援していくことが目標になります。

ベテランの先生からは、年長児を中心に子ども同士のトラブルを可能な範囲でクラス内に共有し、当事者の気持ちを理解しながらみんなで解決策を考えるという実践もうかがいました。このような取り組みを通じて、当事者以外の子どもたちにも考える姿勢が身につく、解決策の引き出しが増えて、レジリエンスが育まれるということでした。

レジリエンスを育むためのかわりには、時間がかかることも少なくありません。そのため、園の先生方が心に余裕をもって子どもに寄り添える環境を整えることも、レジリエンスの育成においてとても重要であると考えています。

図2 レジリエンスを高めるための保育実践

子どもの新しい状況への挑戦のステップ

理想と現実のギャップを認識する

自分自身に負荷をかけすぎない

先生や友だちのサポートを得る

できたことを喜び、自分を肯定する

保育者の受け止めのステップ

子どもの気持ちを受け入れる

子どもが自分の気持ちを表現できるようにサポートする

子どもが他者の気持ちを理解できるようにサポートする

異なる考えを尊重する

子どもの成功や成長を促進する

「乳幼児の生活と育ちに関する調査」より

乳幼児家庭における子どもと保護者のデジタルメディアの使用実態

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）とベネッセ教育総合研究所は、共同でプロジェクトを立ち上げ、乳幼児の生活や発達についての縦断的な研究を行っています。今号では、2016年度に生まれた子どもをもつ保護者に対して毎年1度、継続的に調査する「乳幼児の生活と育ちに関する調査」から、デジタルメディアに関する結果を抜粋してご紹介します。

デジタルメディアを使用させる理由の1位は「子どもが使いたがるから」

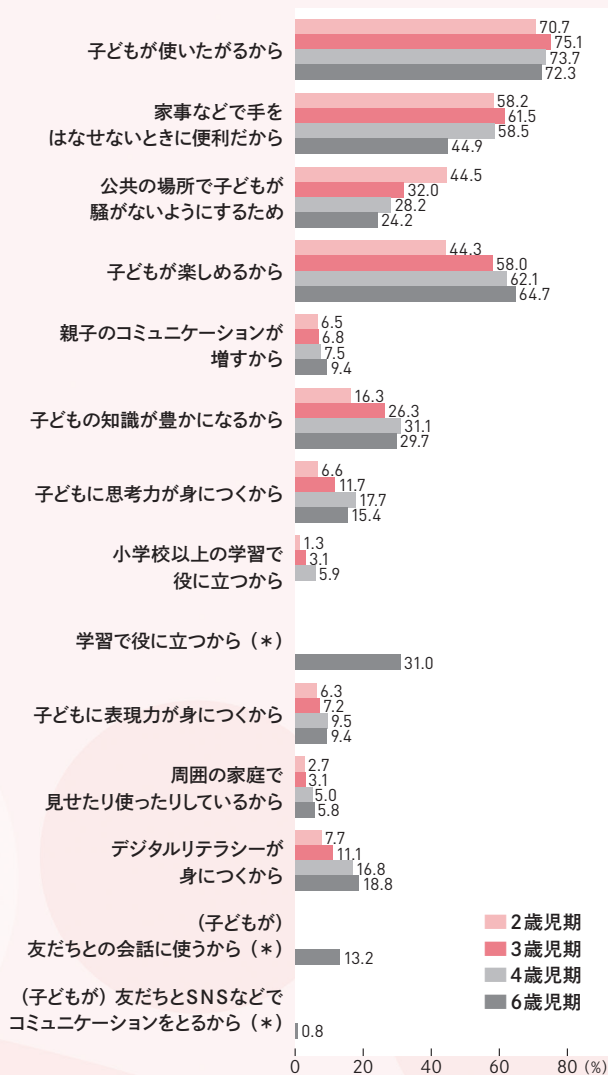
本調査では、2歳から6歳までの期間で、乳幼児がデジタルメディア（スマートフォン、タブレット端末）にどのようにかわり、保護者自身も含めてどのような使い方をしているかについて聞いています。

図1は、デジタルメディアを子どもに使用させる理由について、2歳、3歳、4歳、6歳の各時点で保護者に聞いたものです。もっとも多かったのは、すべての年齢で「子どもが使いたがるから」でした。一方で、年齢が上がるにつれて割合が減少する項目は「家事などで手をはなせないときに便利だから」「公共の場所で子どもが騒がないようにするため」でした。子どもの年齢が低いほど、保護者が忙しいときや、公共の場などでふるまいに気をつけたいときに、デジタルメディアを活用している様子が見えられます。

また、年齢が上がるにつれて割合が増加する項目は「子どもが楽しめるから」「子どもの知識が豊かになるから」「デジタルリテラシーが身につくから」などでした。子どもを楽しませるとともに、デジタルメディアを通して知識やリテラシーを徐々に身につけてほしいという保護者の願いが表れている様子が見えられます。

このように、保護者がデジタルメディアを使用させる理由は、子どもの年齢に応じて変化していく様子がわかります。

図1 デジタルメディアを子どもに使用させる理由



※複数回答。 ※ (*)印は6歳児期のみでたずねた項目。
※5歳児期は質問の形態が異なるため、掲載していない。

「乳幼児の生活と育ちに関する調査 (2017-2023)」調査概要

目的: 2016 年度に生まれた子をもつ保護者に、年1回の追跡調査を行うことで、子どもの生活や発達と保護者の子育ての変化を知り、よりよい子育て支援を考える。

調査時期: 2017 年9月～10 月(子どもの年齢: 0 歳6か月～1 歳5 か月) から毎年9 月～10 月に実施

調査対象: 2016 年4 月2 日～2017 年4 月1 日生まれの子どもをもつ家庭3,205 世帯(調査モニター)

*ここでは0 歳～6 歳まですべてに回答した母親1,402 人、

父親1,024 人が対象

https://benesse.jp/berd/jisedai/research/pdf/2017_2023_Nyuyouji.pdf

調査内容を詳しく知りたい方は、こちらからアクセスしてください。▶▶▶



データ解説

ベネッセ教育総合研究所
調査研究室 主席研究員

高岡純子 たかおか・じゅんこ



乳幼児領域を中心に、子ども・保護者・園を対象とした調査研究、乳幼児とメディアの研究などに携わる。

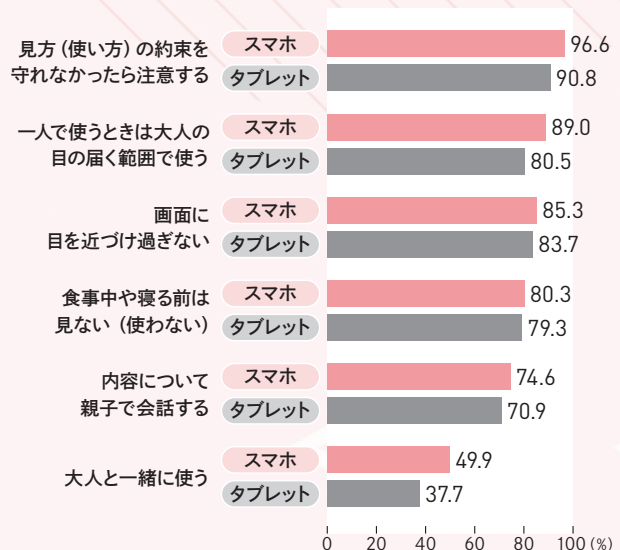
スマートフォンとタブレット端末では、使用ルールに異なる傾向も

6 歳児をもつ保護者にスマートフォンとタブレット端末の使用ルールについて聞いたものが図2 です。「見方(使い方)の約束を守れなかったら注意する」「一人で使うときは大人の目の届く範囲で使う」など、多くの項目で肯定的な回答(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)が8～9 割を占めました。約束を守ることや大人の目の届く範囲での使用以外にも、身体面、生活面での影響などに配慮して使用させている様子がうかがえます。また、すべての項目でスマートフォンのほうがタブレット端末より、ルールを設定している割合が高くなりました。特に差が大きい項目は「大人と一緒に使う」で、大人と一緒に使われやすいスマートフォンに比べると、タブレット端末は子どもだけで使うことが多いようです。

図3 は、保護者のデジタルメディアの使用について聞いたものです。「子どもと顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」「子どもを遊ばせているときに、スマートフォンなどを操作して、子どもへの注意力が散漫になってしまっている」ことが「1 日に数回程度」以上という回答が、いずれも2～3 割でした。

保護者がデジタルメディアを使用することで親子のコミュニケーションが阻害され、子どもの生活や発達に悪影響が生じる可能性があることを「テクノフェレンス」といい、注目されています。テクノフェレンスの状況に陥らないためにも、子どものデジタルメディアの使用ルールを親子で確認するとともに、保護者自身のデジタルメディアの

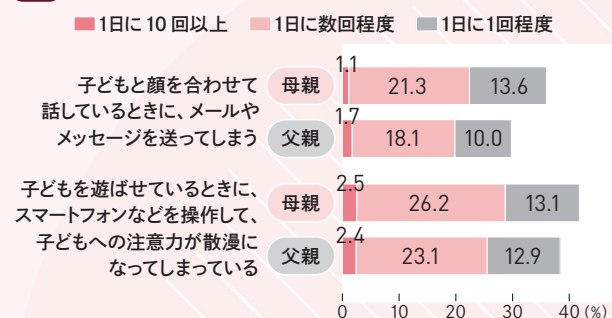
図2 デジタルメディアの使用ルール



※数値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計。

※6 歳児をもつ保護者のみの回答。

図3 保護者自身のデジタルメディアの使い方



※数値は「1 日に10 回以上」「1 日に数回程度」「1 日に1 回程度」を抜粋して掲載。

使い方が、子どもとのコミュニケーションにどのように影響しているかを振り返ることが必要です。ぜひ園からも保護者にお伝えいただき、保護者自身の気づきにつなげていただければと思います。